

2002（平成14）年度 東京大学 入試問題 第1問 解答例

一 自己の死は、決して体験したことがなく、生きている現在においては論理的に知りえない完璧な未知であるということ。

* 「つねに・未来形でしかありえない」 = 「論理的に～完璧な未知である」。

二 第三人称の死は、珍しくない既知の消滅、消失にすぎないので、未知である自己の死を知るうえで何の役にも立たないから。

* 「なぜ「陳腐」なのか」という問いは、「第三人称の死は、陳腐だ」という判断の論拠を問うているので、必然的に解答の主題は「第三人称の死は」となる。これを中途半端な表現に言い換えるべきではない。

三 自己の死の徹底的孤絶への恐怖は、かえって自己の生が孤絶せず、人間としての関係性のなかにあった明証となるということ。

* 解答の骨子は、「孤絶死に対する恐怖は、逆説的に、人の生が孤絶していない（＝人間である）ことの明証である」という点にある。それが「消極的 negative」、すなわち否定形による明証ということである。（「消極的／積極的」の説明は、誰であれ困難であろう）

四 知性的に理解された表層的な人間の孤絶性は誤りであり、人は人と人との間の関係性のなかで生きているということ。

* 「身体的」「他者」などは解答内容として見当ちがいである。東大の出題者サイドはそこに漢字問題を置いて回避するようにヒントすら出してくれている。傍線部は「表層的な人間の孤絶性が誤り」であり、「人」は「人と人（との間）の関係性＝人間」として生きていることの例証として記されているのである。まず、**楽器や車の例が身体**の非孤絶性を、「他方」、**自己（意識・精神）による自らの身体**の支配が**他者の模倣**によるという例が、**自己（意識・心）の非孤絶性**を、それぞれ例証として説明している。**鉄棒の話題は後者の例中例**にすぎない。身体も、他方、自己（心）も、孤絶していない、ということになる。したがって、解答に「身体・他者」などと書いても、具体例の一端を書いているだけである。「身体性」の重視は現象学的身体論などにありがちだが、先入観に陥らないようにしよう。

五 人が人と人との間の関係性のなかで生きるという観点では、生にある限り、知性において理解された表層的な人間の孤絶性は抽象的構成に近い誤りとなる。それゆえ、第一人称の迎えようとする死のみが、その恐怖によって自己と他者の隔絶を切実に自覚させるから。（一二〇字）

* 人間の生は、「人間（人と人との間）」としての生であり、孤絶などしていない。とすれば、「知性において・抽象的に構成」された孤絶ではなく、**真の孤絶**を（肌膚に烙印のごとく）「自覚」させうるものは、「恐怖」を伴う、自己が迎えんとする死のみであろう。

*「第二人称が介在」する「積極的な意味」については、問題文の範囲内では情報が決定的に不足しており、問いが成立しない。当然東大の出題者は問い得ない内容として、設問を付していない。問わないということが、正しい読解をしている証左である。それをあえて問うとすれば、非論理的で無意味な蛇足である。

六 a 空疎 b 錯覚 c 模倣（摸倣） d 抱擁

Copyright 2023 - 現代文 まなびの礎 All Rights Reserved. 作成者 中野芳樹